営農・技術センターの場外試験圃として新「全農トマトランド」が開場

全農の農産物商品開発室では、平成28年４月に千葉大学環境健康フィールド科学センター（千葉県柏市）に「全農トマトランド」を設置し、実需ニーズにマッチしたトマト商品を提供するため、①商品づくり②技術開発③人材育成を行ってきた。そして令和元年12月には、営農・技術センターの場外試験圃場として新築・移転し、新「全農トマトランド」（神奈川県平塚市）を開場した。

オランダを手本とした新たな温室の構造

新たな全農トマトランドは、世界屈指の施設園芸先進国であるオランダの温室を手本に設計されている。オランダでは、平均反収60～70ｔ/年、最高収量100ｔ/年を超える収量も報告されており、トマト栽培のベンチマークとなっている。

この温室は、オランダの標準仕様である高軒高構造（軒高6.0ｍ、誘引高4.0ｍ）、統合環境制御装置、作業台車のレールを兼ねた温湯管暖房設備を採用するとともに、日本の過酷な栽培環境に対応するため、気化冷却装置（Pad&Fan）、加湿装置（ミスト装置）、LED樹間補光装置を導入している。これらを有効に活用するため、生育調査を毎週実施し、得られたデータをもとに環境制御を行っている。

軒高6.0ｍの温室

新「全農トマトランド」に取り入れている温湯管レールとロックウール養液栽培

ミニトマトに特化した新「全農トマトランド」

トマトは家庭消費支出額の上位にランクインする重要な品目である。最近の傾向としては、少子高齢化や人口減少、核家族化、共働き世帯の増加などを背景に、大玉・中玉トマトから、良食味でお弁当などにも利用しやすいミニトマトへ消費が移りつつある。そこで本施設では、これまでの「全農トマトランド」のコンセプトを踏襲しつつ、ミニトマトに特化した取り組みを行っている。

商品づくり

成分分析や消費者嗜好を意識した官能検査を行い、新しいミニトマトブランドのための有望系統を選定している。また、この施設で生産されたミニトマトブランドは、隣接するＪＡ全農青果センター㈱と連携して量販店で試験販売を行い、実需評価を商品づくりに反映している。

収穫されたミニトマト果実

技術開発

ミニトマトの場合、７～８月は高温による生育障害や果実品質の劣化がリスクとなるため、栽培を回避するのが一般的である。その結果、９～11月の取扱数量の低下（端境期）が課題となっている。そこで、夏季高温期に気化冷却装置（Pad&Fan）などを活用した高温対策の試験を実施し、端境期にミニトマトを供給するための技術開発を行っている。

人材育成

営農・技術センターが開催する各種講習会や研修で、①栽培に必要な植物生理②植物管理作業の方法③生育調査に基づいた環境制御の方法を提供している。

●視察の受け入れについて

試験研究圃場のため受け入れの時期、人数に制約があるので、興味のある方は下記までお問い合わせください。

問い合わせ先

全農　営農・技術センター　農産物商品開発室

☎0463－22－1024

・視察受け入れ期間

令和２年度は９月下旬頃から翌年３月頃までを予定

・視察日

植物防疫の観点より、毎週木曜日の午前もしくは午後

【全農　営農・技術センター　農産物商品開発室】